室生雜記

荒木良仙著

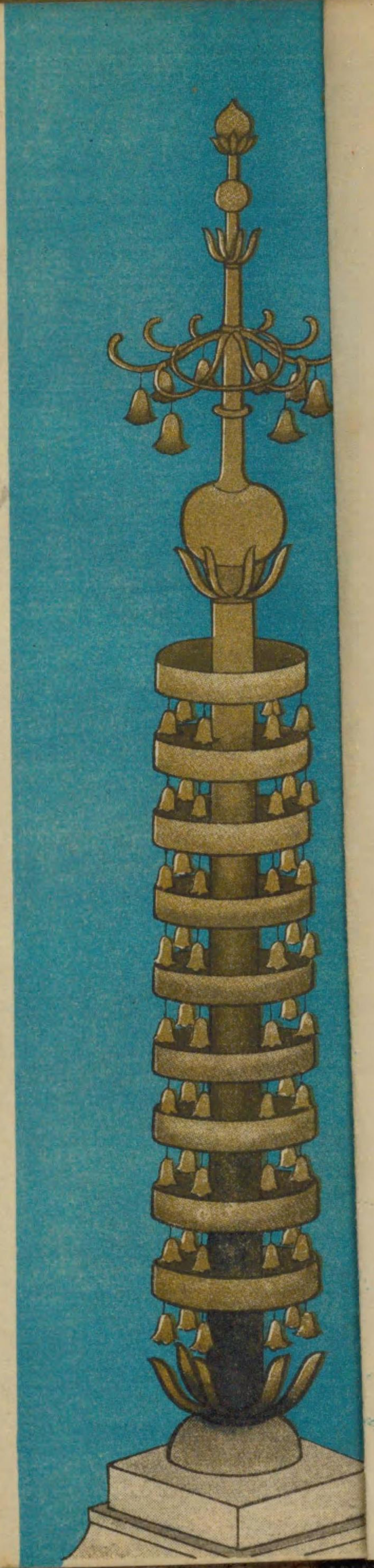
590
474

590-474
1200501525835

590
474

590
474

室生雜記



590
474

帝國圖書館藏
贈呈

室生雜記

如意山人著

昭和六・五・二一 贈 帝圖
發行所寄贈本

590
474

590-474

凡例

一、本書は室生山の實體を知らしめやうとして纂めたものでは無い。此の靈山に入つて觀念を凝らし、親しく其の淨境を味はふとする同好者の爲に編んだものである

二、本書に收むるところの十一編は昭和三年から同五年へ亙つての隨感隨錄である、而して又諸編編次の順序は必ずしも成稿の年次に依ら無い。言はゞ雜然と編者の心殿に描いた室生の縮圖とも見るべきものである

發行所寄贈本

590
474

三、本書の出版に關し、川邊多喜男氏から多大な助力を得た、記して之れを感謝す

昭和六年春

著者識

室生雜記 目次

一 金堂の緣に立ちて……一
二 恩光を浴びて立つあらゝぎ……一〇
　　— 五重塔 —
三 河鹿……一五
四 佛にかしづく心……二一
五 奥の院詣で……二九
　　— 二人の忍行女 —

590
474

六　山巡り……三五
七　三寶鳥……四三
八　誦經の會……五四
九　寶　珠……五八
一〇　龍穴に寶珠を求むるの記……六七
一一　信の躍動……七一

以　上

目　次　終

室生雜記

如意山人著

一　金堂の縁に立ちて

私は日毎〳〵諸堂の巡拜を行ふのである。先づ鑁字ヶ池の傍にさゝやかにしつらひられた辨天堂の禮拜を濟まして、老櫻の幹に蔽はれた石段を昇つて行く。其の石段を昇り詰めた右手に、菩提樹の大木が枝指し伸べて立つて居る。其の姿勢が、恰も

590
474

樹下に祭つてある青面金剛の寶蓋を形造つて居るやうに見えるのである。而して又ゆんでのみ堂――即ち天下の逸品と稱せられて居るところの白檀木立像の彌勒菩薩を奉安した光明堂、續いて金堂――總じて此のお山の諸尊像は女人高野の名にふさはしく何れも小さなものであるが、獨り此のみ堂に祭つてある地藏菩薩、藥師如來、釋迦牟尼如來、文殊菩薩、十一面觀世音菩薩等の諸尊像は、其の御すがたが如何にも大きい。而も夫等の御尊像が五間五面の金堂に祭つてあるのだから、一寸見には尊像とみ堂との調和が取れて居ないやうに思はれるのであるが、流石は何れも雄作の然からしむるところから、伏し拜んで居るうちに、おのづと心を牽きつけられるやうになるのである。斯かる尊い御像のかずかずをお祭りしてあるみ堂の外縁で、私は丹念に諸尊の眞言を誦するのである。元來、此のみ堂は、山寺の地形にふさはしく建

てられたものであるから、禮堂の一部と、此の縁とは床下高く前の方へ差出して造られてある。此の縁の上に立つと、何時も私は至心に禮拜せしめられるやうに導かれることを異に思ふ。斯うして順次に灌頂堂、塔、奥の院へと歩を運んで、心往くばかり經を誦し、嵐氣を浴びて、吾が心を澄ます樂しさは到底筆に盡すことが出來無い。さうして其の歸途に護摩堂への參拜をなすのであるが、斯うした巡拜の其の折に、暫し金堂の縁に立つて四周を顧望する爽快味は、實にも山寺の賜であるといはなければならぬ。

此の金堂が、眞言密教の道場たる室生山に取つて如何なる地位を有するものであるかといふことに就いては自ら別の見方がある。寺史の傳ふるところに依れば、此のお山は弘法大師が震多摩尼如意寶珠を勞籠せられた場所であるといふことにな

590
474

つて居る。其の如意寶珠は、弘法大師が、今から一千二百二十六年前の延暦二十三年に入唐の機縁を得、其の翌二十四年、惠果和尙に値遇して傳法灌頂を受け、眞言秘敎の玄底を盡して面授せられたのであるが、其の折の附屬物中の至寶として授かつたところの秘寶、密敎の道肝たる唯一無二の珍寶である。其の如意寶珠を勞籠された關係から、此のお山の諸尊像とみ堂とは、悉く皆眞言密敎の成立、特に蘇悉地道場としての組織に本據を有するのである。奥の院にお祭りしてあるお大師樣、其のお膝に奉安してある塔、本堂の如意輪觀世音菩薩、光明堂の彌勒尊、五重の塔の相輪の寶瓶、天沼博士の說に依れば、其の寶瓶には、當初、舍利を收藏したものであらうといふことである。

斯く寶珠を根本として設けられた密敎道場——伽藍設備といふことを考へて見るならば、金堂を一に藥師堂と呼んで居る事に就いては深甚の思考を運らして宜

いと思ふ。同博士が、金堂禮堂の蟇股の側面に、薄肉に壺の形が彫刻してあるところから考を回らして、此の禮堂が、後年、藥師佛を禮拜する爲に附け加へられたものであるかも知れぬと言はれて居るのは、大に注意せなければならぬ點であらうと思ふ。現今に於ては、釋迦牟尼佛を正面尊として向つて右に藥師如來、地藏菩薩、向つて左に文殊菩薩、十一面觀世音菩薩の順に奉安してあるのだが、此の奉安の仕方が果してみ堂と適合して居るかどうか。諸尊像の形體の大小と、同堂壁畫の帝釋天曼荼羅とを併せ考ふるならば、そこに又室生山に於ける金堂の地位に就いて、別個の見方を導いて來るやうに思はれるのである。

私は昨年の秋、歷代先師の墓地を修營することを思ひ立つて、石垣の積み替ひ、塔の建設、地區の整理等を行ふたのである。其の折に、當山に深い緣故を有する桂昌院殿

590
474

墓地の玉垣の修理、五輪塔の配置等をも併せ行ふた。而して未熟ながら、連日工事の監督をしたのである。或る時、此等の伽藍即ち五重の塔、灌頂堂、金堂、光明堂等を一眸の裡に收め得る適當の場所は何處であららかと探し求めたものであつた。斯くして、私は金堂背後の突端こそは、顧望の天地を最も豊に有する場所であらうと思ひ附いた。そこからは、五重の塔の最下層から頂上の寶蓋迄望み得る、又灌頂堂のなだらかな屋根、料栱の美しさ、蔀格子、二重棰の巧妙な姿勢まで見分けることが出來るのである。更に又壽杉と斷崖との間に、金堂と光明堂との屋根を俯瞰する心持は誠に是れ茂林に圍まれ、衆鳥の諧音を耳にしつゝ、幽寂の想を懷いて眺め入る樂しさである。然うした情景を恣にし、煢然金堂の緣に立つて想像の翼を擴げるならば、あの垂直な柱、見事な料栱、巧みな肘木、さては大虹梁繋虹梁等の美しさ、合掌のしつらひ、桁鼻の工

夫など、獨り建築の專門家が飽かず眺め入る優秀の出來ばいであるに止まらず、誠に嚴たる靈堂の尊容である。然かのみならず、弘法大師の御作として傳へられて居るところの御丈一丈の釋迦牟尼如來、同じく何れも御丈八尺の藥師如來、文殊菩薩、さては聖德太子の御作として傳へられて居るところの十一面觀世音菩薩、地藏菩薩等の諸尊像は、物ふりた此の堂內に奉安してあるのである。其の刀痕のあざやかさ、ふくらみのあるみ足のおん樣子。私は其の端嚴の姿勢に魅せられて、眼のあたり禮拜した其の後は、暫しの間、大いなるものに押さへられるかの純の心になるのである。そこに、ほんとうの端嚴さがあり、吾等を引きつける偉大さがあるのであらう。又此等諸尊像の前並びに、運慶の作と稱せられて居るところの十二神將の諸像がお祭りしてある。之れを作の上から見るならば誠に申し分の無い立派なものであるのだが、

590
474

何としても後ろに月にもたぐうべき大作がお祭りしてあるのだから、夫等の諸尊像に對して、此等十二神將が星のやうに見えるのも無理からぬことであらう。　斯ういふやうな尊い諸佛、諸菩薩、諸神將をお祭りしてあるみ堂の外緣に立つて、私は今や想像の翼を收め、現實の大景に直面することゝしやう

木の間を掠めて遙かあなたに流れて居るのは室生川である。　岩に激し瀨を早めて、磊塊の石を嚙みつゝ流れ行く奔湍、河鹿鳴く谷あひ、川せみの飛び交ふ沿岸の折れ枝、目遙かに見降せば、山村の急流は、まことこゝのみに惠まれた情景である。　今春T畫伯は、石段を蔽ふた櫻花の散りゆくさまを畫にしやうとして登山されたが、春は既に早く逝いた。　眼前の此の濃綠、私は其の生氣に心を奪はれざるを得無い。　彼の矗として立つ古杉、老檜、さては枝もさはに繁れる茶山花、椿、躑躅、石楠木は恰も思ふがま

ゝに舞ひ終つて憩へる舞姫にも喩へつべき今の靜けさ、何れも皆好きものゝすがたである。　眼を轉じて天邊に飛ぶ白雲を望めば、青愈青、目はるかの涯なき大空に、吾が心の牽かれゆくを覺ゆる忘我の神境よ

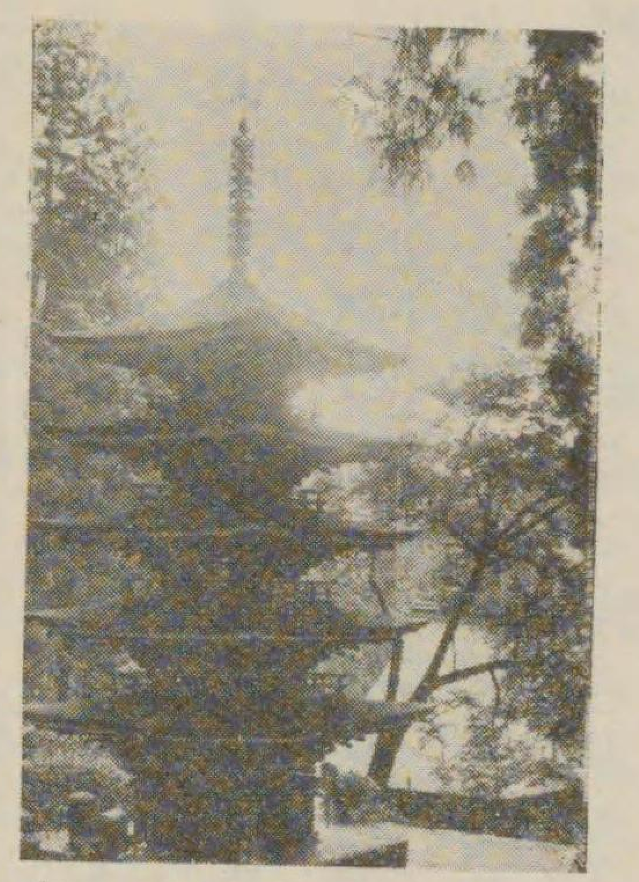
金堂の緣に立つて私は今限り無き思ひに耽つて居る――（昭和四、八、）

590
474

二　恩光を浴びて立つあらゝぎ

——五　重　塔——

私は今から二十年程前に、吾が籍を置いて居る宗派の學校に職を奉じて居つた關係から、學生十餘名を率ひて奈良、初瀬、室生、根來、高野、京都諸山の巡拜を行ふたことがあつた。　當時、青年の私は、懷古の血潮を胸に湧かして「吾は眺め入りぬ、眺め入りつゝ運命の慘苦に泣きぬ」といふシモンズが雙句に、限り無き興趣を覺えて、一句に餘る旅の空を、憂さをも知らで過したものであつた。　其の際、奈良の旅籠の緣に踞して、吾が觀法の對象を興福寺の五重の塔に求めたのである。　偉なるかな層塔、猿澤池畔に聳



立する雄大の壯觀は、げに吾が心を奪ふものが無ければならぬ

昭和三年の春、芳野、單瓣のさくら花が、そこゝと咲き誇る山寺に、私はゆくりなくも留住の機緣を得て、吾が魂をシンタマニの靈峰に宿したのである。　シンタマニの靈峰には、眞言密教に取りて唯一無二の法寶物が勞籠されてあるのだが、數ある建物も亦伽藍設備の點から見て、何れも皆重視されて居るのである。　而して其の一に、弘法大師の造營に係ると稱されて居るところの五重の塔がある。　其の塔は工學博士中村達太郎氏の說に依れば、弘仁期に於ける代表建築と言はるべきものであるとのことである。　總高さ五丈三尺四寸、我が國に於ける現存の五重塔中最小型のものである（天沼工學博士著『日本建築史要』に依る）。　我が五重の塔は、杉木立の密林を後に負ひ、前面稍開けて、奥の院參道の傍に立つて居る。　先年、矢澤弦月畫伯が、秋の風物を取り入れて五重の塔を

590
474

畫にしたことがある。其の畫は帝展の呼び物となつた。隨つて近世の傑作として、三四年前の明治大正記念繪畫展覽會にも出陳されたのである。料栱の工夫、勾欄の布置、相輪の意匠、何れも皆此の建物の偉觀とするところである。私は、をり〳〵此の五重の塔を凝視して默想に耽ることを樂みとして居る。或る時は木の間を透うして之れを眺め、或る時は前面より其の美觀を仰ぎ、或る時は傍に立ちて默示の説相を觀、或る時は石階に踞して遙に之れを下瞰し、或る時は雨に煙る風趣を愛で、或る時ははろらかの大氣を浴びて立つ雄偉の姿に見入るのである。而して彼の夕映ゆる塔影に至つては、自然と人工と、誠に能く諧和して一層の趣を添えるのである

青龍社の川端畫伯が、往年、慈悲光を禮讃して一幅の畫を描いたことがある。それは森林中の廢池に抛げられた日光を浴びて、池中の魚が跳躍する生の描寫であつた。

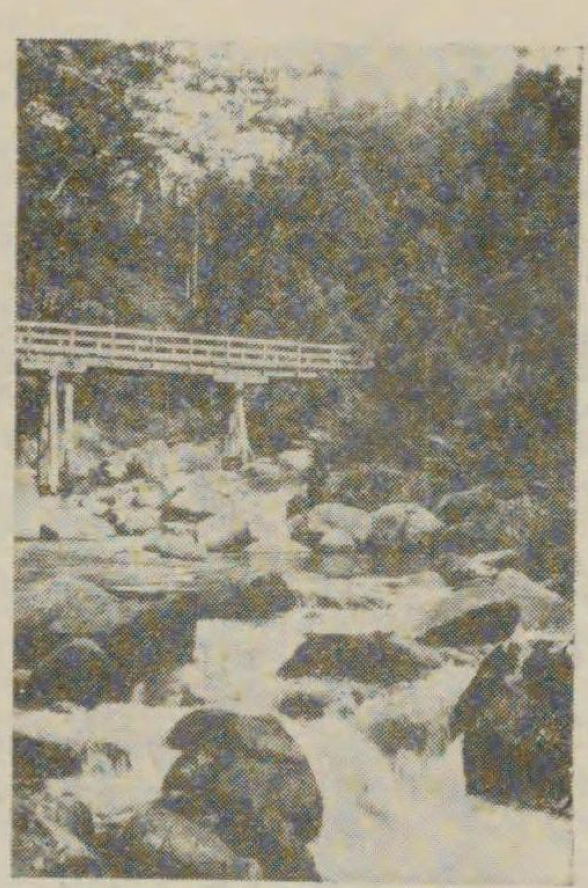
此の世に於ける太陽の光こそは、誠に慈悲光として禮讃さるべきものである。私の住する里に「朝日さし、夕日かゞやくすがまでこんご、おせん萬貫、小せん萬貫、みつば空木のその下に」といふ俚謠があるが、此の歌は、弘法大師が入唐歸朝の後數ある寶物を埋めたといふ菅間出の情景を詠んだものである。そこの山頂には、朝な〳〵、精進ヶ峰から放射する強い金線が光り輝くのであるが、夕にはまた夕の趣がある。山の端にくれなゐの入日を呑んで夕燒けする一帶の邊際には、誠に言ひ知れぬ莊嚴の一面が浮ぶ。錯雜せる樹枝とたゞよふ空氣を透うし幾筋かに分れて木の間を洩れる赫灼の金色、其の強い光を塔尖にそゝぐ有樣——寶珠、寶鐸、寶瓶、相輪、何れも嚴なる雄姿である。逍遙遊を好む私は時折に夕日を浴びて立つ五重の塔のあたりを、往きつ戻りつ冥想に耽るのである。思へば此のさはなる天惠も、猶ほ摩訶毘盧遮那如來一分

590
474

の徳相を表すに過ぎ無い。されば、塔内に安座まします五智如來に、限り無き信を凝らして、渾身に歸命し奉る吾等の行持は、まこと地上の宿福であると言はなければならぬ

泰西のさる畫家が描いた聖者の像は、ヘーローを浴びて一段の光彩を放つと共に、其の畫の缺陷を補ふて、眞の價値を表はすに至るといふことを聞いて居る。無限の天惠下に立つ我が層塔の雄姿も、夕日に映えて著しく其の端嚴さを加へるのである。緑樹と恩光と、此の二のものこそ、まこと汝に取つての天衣として祝福さるべきであらう（昭和四、一〇、）

三　河鹿



新緑の山陂を縫ふて流るゝ室生川に、日となく、夜となく河鹿の鳴く音を聞くのは、山居のまた無き興趣である。　昨年の四月頃、製板機の軋りに、諧調ある音響を味はせるやうな詩心を懷かしめるあのほがらかな聲を、私は、せゝらぎの騷音と共に間も無く聞いたものであつた。　夫は正しく「山川に小石なかるゝころ〳〵と河鹿なくなる谷の落合」といふ歌の心と同じやうに、河鹿の鳴く音に聞き惚れた山村の眞樂境である。　今年の三月中ばから私の處へ來て、否、震多摩尼の寶處に純眞の思慕を寄せ、永い間念誦法の修行

にいそしんだM法學士が、實行院の淨室からうたうたひ（河鹿またうたうたうたひともいふ）の聲を聞いたのは四月上旬の頃であつた——山村の幽境は、いつしか河鹿の鳴く音を聞くやうになつたのである

久しい冬眠の季節、夫は紅に染んだ濶葉樹が落葉して、澗水、溪流苟も水あるところ、何處か堅氷に閉されないところを見ないのである。　彼の水晶の珠玉、氷柱、氷塊、白絹を展べたやうな谷あいの結氷、塔尖の光にも嚴冬の貌が見え、こゝかしこと園丁子が數旬の工夫に、來るべき春興を待ち設けて、新粧を凝らした皐月の葉末にも石楠の根もとにも甦らぬ枯死を思はせるやうな冬は永かつたのである。　梅蕾春を報じて鶺鴒のチヽと鳴く其の聲に、春らしいおとづれが聞えるやうになつては、やがて啓蟄の伸びた心を持つやうになるのである。　沍てついた掛け樋の氷も解けていつしかピ

ピピピピッと怪しの音を立てるやうになつた。　春はもう充分である。　芳野、單瓣のさくら花が、鐘樓堂のあたりから、こたび新に設けたコートの後丘、金堂への道を挾んだ山櫻のトンネル、さては如意峰の綠樹の間に、又、室生川の岸に臨んで枝指しのべた巨大の櫻樹が、おほらかに咲き誇る彌生の頃ともなれば、幽境室生に取りて河鹿の鳴く音に聞き惚れる興趣は、誠にさびた別乾坤であると言ひ得るであらう

『日本山海名産圖會』に「洛には、八瀨にもとめ、浪花の人は有馬皷が瀧の邊に捕る物、即ち井堤の蛙に同物にして、今のかじかなる事疑ふべくもあらず、されば、和歌にはかはづとよみてかじかとはよまざるなり、かじかの名は彌々俳言といふに愆ちなかるべし、昔、井堤のかはづをそゞろに愛せしことは書々に見えたり、今、八脊、有馬、井堤に取るもの、悉く其の聲のあるにもあらず、かならず、閑情に鳴く物は又其のさまも異なる所

590
474

あり。是れ蝦蟇の一種類にして蒼黒色なり、向ふの足に水かきなく、指先皆丸く、清水にすみて、なく聲夜はこま鳥に似てころ〳〵といふがごとく、六七月の間、夜一時に一度鳴けり、晝もなきて鵑の聲の如し。尤も足早くして捕ふにやすからざれば、夏の土用の水底にある時をのみ窺ひて捕れり云々」と記してあるが、室生川に住むかじかも、其の聲音の高きこと鵑の聲にもまがふやうである。又『物類稱呼』に「但馬國に一種の河鹿とよぶあり、谷川の流にすみて濁る水にはすまぬもの也、其の聲鹿に似たり、故に河鹿と呼ぶ」といふ記事や、『笈埃隨筆』の「爰に一種の物有り其聲麗々と清く澄みて、初夏より中秋のころまで水底にありて鳴く、是れを河鹿といふ云々」と記してあるやうに、誠に其の聲麗々として俗塵を洗ふの感がするのである。更に又『北窓瑣談』には「聲さやかにて駒鳥に似たり」とさへ述べてある。さてもそのやうに、我が愛する河鹿の聲は、鹿の聲にもまがふべく、又駒鳥の鳴く音にも似通ひて、山村のしゞまを破り、聲朗々と響き渡るのである

○

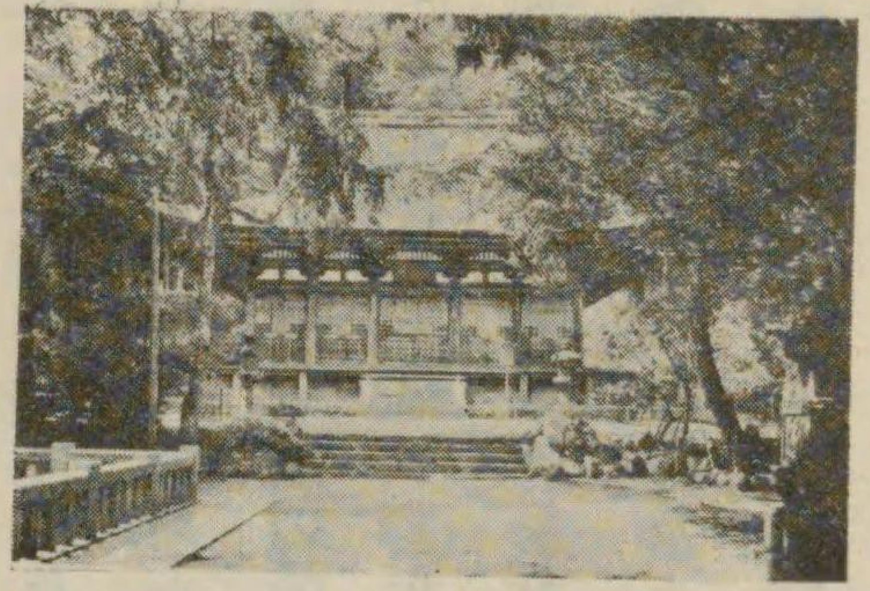
此の頃讀んだラビンドラナート、タゴール翁の歌（和田富子譯）の一節に

擧げよ。歡び迎へる汝が烽火を。
おゝさし昇る　旭よ。
開け。東の國の
いにしへの神社の黃金の門を。
其處にこそ人の魂は住ぶなれ。
いやしい塵をも　祝福する

草のやうに偉大(おほらか)に。
星降る下(もと)の　山嶽(やま)のやうに
へりくだりて。

といふのがある。私は此の詩を讀んで、わけも無く涙ぐましくなつた。苟も「眞」に徹する者は、いやしい塵をも祝福する草のやうに偉大でなければならぬと共に、星降る下の山嶽のやうに謙虚であらねばならぬ。おゝ河鹿の音！　何といふ麗朗の響であるぞよ。總ての物に身を隱して、あの小さなからだに滿身の力を籠め、嘵々として歌うたふところの其の性、其の體、私は好きものゝ一として河鹿を數へなければならぬ（昭和四、五、）

590
474

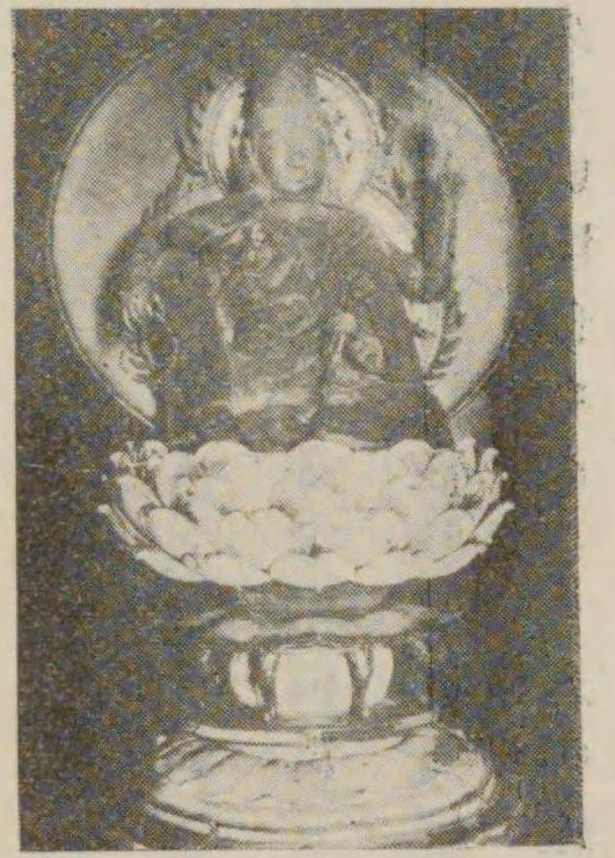


四佛にかしづく心

——灌頂堂——

私はをりをり吾が定められた地位に對して是非を反省し、その當否を識別することに努めて居る。斯うすることは苟も生を營む總ての人が、必ず常に爲さねばならぬところの事柄ではあるが、靜かな心に任せなければ、往々にして其の志を滿すことが出來ない場合がある。人の世に在つて、いらだゝしい思に荒涼の世界を描くおろかしさは、只蒙昧の私にのみ見出さるゝ境涯では無いと思ふ

弘法大師は、人一倍自然を愛し、人類を憐み、佛に仕ふる純の心を持たれたものであつた。私は史を讀み、法を修し、觀念の境に住する如何なる場合でも、そこひしられぬ大師の偉大さに驚かされるのであるが、此の頃、山林に閑居して親しく其の洪業に接し、日ごと夜ごと其の偉績を味ふに及んで、〃〃一層其の感を深うするのである。弘法大師御一生の御事蹟は、何れも皆私共の教訓で無いものはない。あるがまゝの世相に眞實のすがたを見出して、融合冥會せる菩薩行は、まこと、私共のまた無き鑑である。山の貌にも、葉末の露にも、さては夕映ゆる老杉の梢にも、眞實相をつかまへられた燃犀の識見、實證の努力、大師が全身全力を傾注して刀を振ひ、神を込め、眼睛を開いて奉祀された諸



尊のかず〳〵、中にも吾が靈山の本尊として祀られてある聖如意輪觀世音菩薩のおん前にぬかづいて、行法の會座に住する其のこゝろよさは、人の世の何物か能くたぐうことが出來得やうぞ。大師は教範に隨つて法を修し、密軌に依つて堂舍を建てられた。深きが上にも愈深く、廣きが上にも益廣く、眞言行者としての眞際を究められたのである。修文、運筆、講讃、行化、梵唄、法要、つぎ〳〵に現はれる繪巻物のやうな其の一生、而も大師の行はせられた事柄は、單に夫等のみでは無い。灌頂の阿闍梨惠果和尙が、大師に依囑された懇ろのお言葉の中に、眞言道は圖畫を假らなければ眞實を傳へることは出來無いといふことが述べられて居る。隨つて鑄金、彫工の事に迄其の妙手を振はれたのである。弘法大師が、我が邦彫刻史上に、幾多の傑作を殘されて居るのは、全く此の囑命を奉じたが爲である。佛教のあらゆる堂舍の殿宇が、種々の莊

590
474

590
474

嚴具を以て嚴飾されてある現に見るが如き實情に顧みるならば、あの落ちつきの宜い悉地院の內陣に祭られてあるおん厨子の扉を開いて、聖如意輪觀世音菩薩のおん前にぬかづく私のあこがれ、夫は弘法大師に歸依する眞情、其の眞情は大師の手に依つて物された尊像、やさしい中にも嚴として犯し難い御すがたに、絕え間無くかしづき得る我が身のさちを感謝したい

我が敬愛する濱田靑陵氏は『東洋美術』第四號誌上に、道明寺の十一面觀世音菩薩に就いて有益多趣味の一文を掲げられて居る。其の中に「此の道明寺の像に至つては、其の肉身も、其の精神も共に女性の觀音であつて「フェミニズム」の傾向に支配せられて藤原時代の所產として、斯の如き像の現出した事は洵に故あることに違ひない。而して私共日本人は爾來此の女性として表現せられた觀音の藝術に親んで來たの

であつて、私は此の點に於いて眞に大慈大悲の尊像を、此の種の觀音に於て發見するのである。而かも其の現はされたる女性の肉身は、曾つて中宮寺の如意輪觀音などに見た樣な十六七歲の娘らしい少女の姿ではなく、あらゆる婦人の性の發達した女性の形が表現せられてゐるのである。これは即ち藤原時代の精神であり、趣好である。而してそれが彫刻として現はれたのが此の道明寺の尼僧にかしづかれて塵埃の影も見ず、木理の痕いよ／＼滑かに潤つてある」のを喜ぶ云々」と述べられて居るが、佛にかしづくことは誠に斯うした處女性の現はれでなけれぱゆかしく思はれ無い。

わが尊信する如意輪觀世音菩薩は寶莊嚴の冠を頂いた頂髻、思惟の相を現はせる右の第一手、如意寶を持てる同じく第二手、念珠を持てる同じく第三手、山を按ずる左の第一手、蓮華を持てる同じく第二手、輪を持てる同じく第三手の六臂廣博の御容貌は、

590
474

大悲方便の徳相を備へて六道の迷情を救はせ玉ひ、說法自在にましますす御身から千よろづの光明を放つて、頂背に圓光を負はれて居る其の尊き御すがたに、いつも私は心を奪はれるのであるが、斯うした境地に住する淨い心――山を望んだ時の最初の思慕、それは日本全國を巡歷された末に、唐見の辻の其のあたりにたゝずんで、咸陽宮の有樣に似たりとも似たりと、未敷蓮華の靈峰をなづかしみ喜ばれた大師のみ心、其の山を切り開いてあたりにふさはしく建てられた堂舍、就中、其の中樞になつて居る悉地院、其のみ堂の中に祭られてある聖如意輪觀世音菩薩にかしづくことを得る今の吾が身は、何といふ幸あることであらうよ

誠に恐れ多いことではあるが、宮中賢所に奉安せられてある御神鏡は、宮內の女官が之れを守護し奉るといふことである。其の斯く執り行はるゝことは、白河院の御

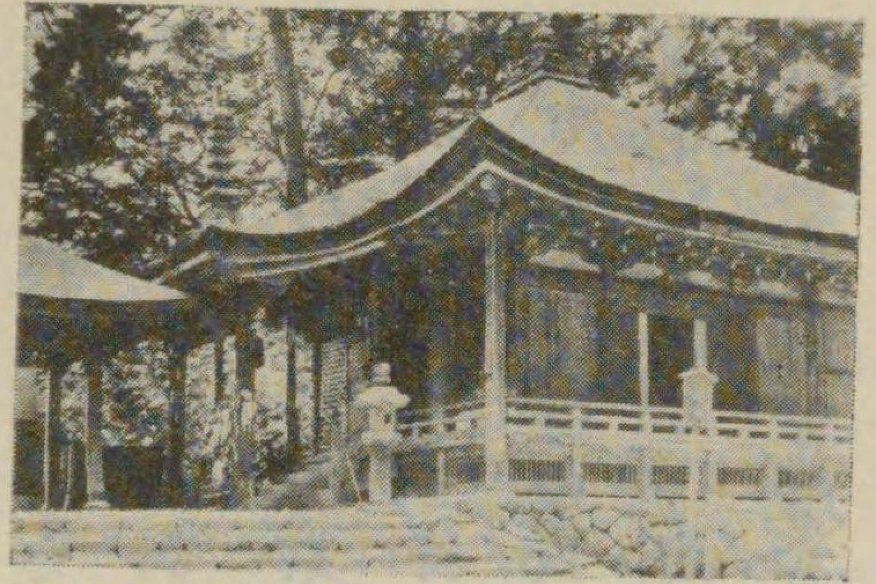
宇に、神鏡の天に飛び上らんとするのを、官女が唐ぎぬの袖に懸けまゐらせて、引き留め奉つたことに來由すと傳へられて居る。斯くも吾が身にかけてかしづくことは、限り無き愛護の念慮を以てせねば得爲し能はぬことである。道明寺の十一面觀世音菩薩が、人の世の塵に汚され無い尼ぎみたちに守られて居る其のゆかしい奉仕も、誠に燦たる地上の輝として、とこしへに其の習例を殘したいと思ふ心の切なるものがある

○

私の心を傾到した御本尊には、吾が身を繫ぐ絆が無ければならない。其の溫い、いつくしみになごめるみ佛の胸に懷かれて、私は、たらはぬ吾が勤を耻ぢらひつゝも、をとめの純潔を以てかしこみ仕ふる其の官女のやうに、世を避けてみ佛を守護する穢

れ無き尼ぎみたちのやうに、吾が尊信歸命するみ佛にかしづく清い心を長養したいと思ふ（昭和一、三、）

590
474



五 奥の院詣で

――二人の忍行女――

或る時は霜を踏んで壽杉に圍まるゝ石階を登り、又或る時は凉を趁うて澗水の音に耳を清まし、まだ明けやらぬ無漏の里に、眼前に迫る未敷蓮華の靈容を仰ぎつゝ、山村のしゞまを破つて彼女等は曉の鐘をつくのである

彼女等が弘法大師に對する心奥の思慕から、毎朝、必ず室生山奥の院に參詣することを念願してから早くも玆に二十年を閲みした。『私は今年の春、計らずも弘法大師の招ぎに預つて室生

590
474

山に住することゝなつたのである。此のお山は女人高野と稱して、眞言宗三道場の隨一に數へられて居るところの尊い靈山である。今、謂ふところの眞言宗三道場とは、紀州の高野山、京都の東寺並に大和の室生山である。此の三つの御山は弘法大師に深いゆかりを持つて居るのだから、古來我が民族の崇敬するところとなつて居るのである。就中、我が室生山は開創既に古く、弘法大師が再營されたものであると傳へられて居る。即ち弘法大師は、此のお山を如意寶珠不二の道場とされたのであつた。なぜ、室生山を如意寶珠不二の道場とされたのであるかといふに――吾れ人は生れながらにして貴い佛性を持つて居るのであるが、其の貴い佛性は恰も月が雲に隱れるやうに、有漏雜染のまつはりから、開現すること無くして居るのである。そこで、日々夜々正念に住して修養をする。佛樣の踏まれた跡を辿つて行く。斯くして

佛性の開現に努める其の一の修行道場として、弘法大師は室生山を御選びになつたのである。「わが身をば高野の山にとゞむとも心は室生に有明の月」といふみ歌は、誠にお大師樣の御心をさながらに現はされたものである。なぜ、お大師樣はみ心を室生の有明の月に寄せられたのであらうか。それには色々の理由がありませう。然し、其の理由の有力な一は、お大師樣が唐へ渡られた際に、其の師惠果和尙から授つたところの如意寶珠を、日本へお歸りになられてから、之れを勞はり籠むるに最も適はしいお山、言ひ換へれば、眞言密教の祕璽を埋めるに契ふところのお山、それは山其のものが尊嚴であり、土地其のものが寶珠と一體となるところの靈境でなければならない。日本朝中山河さはなりと雖も、お大師樣は、我が精進ヶ峯の境域を措いて、他に之れに契ふところの靈場無しと思召されたのである。そこで、惠果和尙から相承し

590
474

來つたところの如意寶珠を此のお山に勞籠した。千百餘年來、室生山が民衆崇敬の對象となつて來たのは、固より然るべきことである――彼女等が二十年此の方、身心を傾到して禮拜の勤を怠ら無いのも、或る機會から、ほんとうにお大師樣の心を身に受けたが爲である

我が山村に住するほどの人は、誰とても同じやうに、お大師樣の御恩を感じて居る。そこで、子供が生れゝば、其の子供はお大師樣から授つたのであるとして喜ぶ。隨つて先づお大師樣へ御禮を申す。小學校へ通ふやうになれば、毎月數回校長引率の下にお大師樣へ參詣する。夏冬の長い休暇には、毎朝列を爲してお大師樣へ詣でゝから、各家事の手傳をする。青年少女は心に懸けて二十一日の御影供會に禮拜することを樂みとして居る。老壯の人々は悉く掃除講に加盟して、毎月十九日に、室生寺の

門前から八丁路の奥の院を始めとして、長い〱石段から五重の塔灌頂堂、金堂、彌勒堂さては庭園の隅々迄、草を拔き塵を掃ふのである。彼等は純の心を以てお大師さまに奉仕する。さういふ生活狀態の間に、彼女等が二十年間一日の如く朝の鐘をつくといふことは莖幹遙に群草に抽んずるが如くに見えるのである

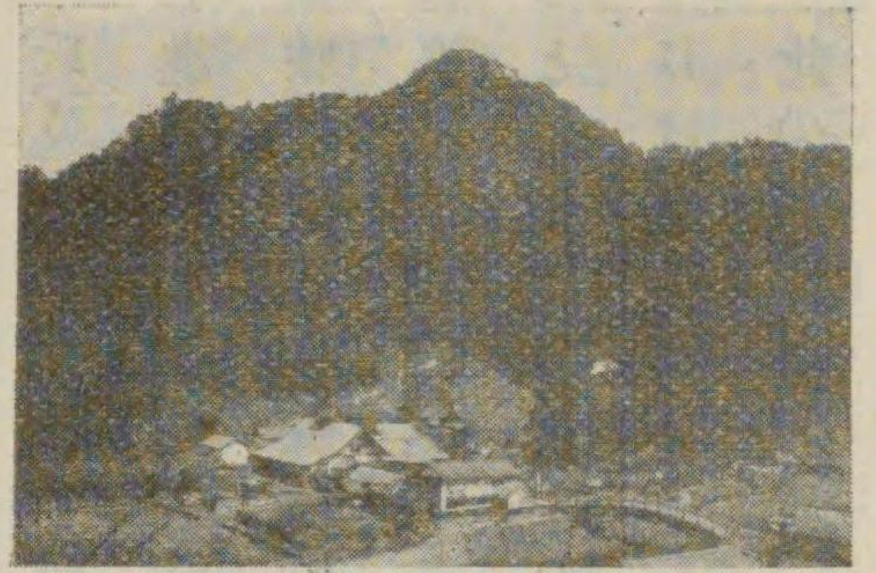
私は毎朝四時に覺眠して、型の如く洗面着衣の作法を行ひ、一山の衆徒を率ひて朝の勤行に就くのである。私の行法が振鈴にかゝる前後に、彼女等のつく洪鐘の音が、ボン……ボン…ボンと一杵〱の間隔迄能く作法に適うて曉の闇を破るのである。其の時彼女等は衷心の歡喜を胸に懷いて、奥の院へと、鐘樓堂から七丁の途を辿るのである。斯くして闇を逢ひ、嵐氣を浴びて、御影堂へ達するや、心往くばかり祈念を凝らし、もと來し途へと引き返すのであるが、歸りすがら、彼女等が護摩堂前で拍手を打

590
474

つ頃は、概ね私が後鈴を鳴らす其の前後である。私が修す一座行法の後鈴こそは、我が尊信の阿遮羅尊を御送りする樂であると同時に、又我が虔信の彼女等を送るところの樂となつて居る

忍行の姉妹嘉女子志雄子の二人よ、お前樣達は大師尊信の德者として、正しく世に傳へねばならぬところの偉大な女である(昭和三、一二)

六　山巡り



「そら又居た」

おどかしてはいけない——私は愕然として飛び退いた。鏡花先生の作中に出て來る蛇に對してすら、身の毛をよだたせるところの私である。其の蛇嫌の私が、現前にニヨロ〳〵する或は金色の、或は黒色の、或は赤棟蛇或は黄領蛇などと、如何に弘法大師の在せしそのかみから、蛇で有名になつて居る精進ヶ峯とは言ひながら、さう鎌首の御見舞を受けては、小心の修行者全く以て氣味が悪い。　時しも私は昭和三年度の施業案を立てる爲に、山寺の經營に須要な

山巡りを行ふことゝなつたのである。同行者には山林事務所のM氏、O氏、警務部のA氏、さては寺内の誰彼など、同勢總て九名、蔦葛を引き去り、雜草を分けて密林の奥へと進み入つた其の時に、豫て斯くあらんとは思ひ設けて居つたものゝ、今更ながら、無氣味な鎌首の連續的來襲を受けては、誠に悚然たらざるを得なかつたのである。私は久しい間、關東の某寺に住して居つた。外出勝であつた私ではあるが、毎年夏になると、盂蘭盆會を修行する爲に、必ず其の寺へ歸ることゝして居つたのである。回顧すれば、私が其の寺に住して居つたのは十七年の永い間であつた。その永い間に、私が此の心願を充すことが出來なかつたのは只一年、チブスを病んだ大正六年の夏丈であつた。私は寺へ歸るに臨んで、毎時も「又蛇と同居だ」と口ずさむのである。眞實、長押の邊りに眼を光らして居つたり、座敷の隅にとぐろを卷いて居るやうなことは

茶飯事である。私の友人N氏が都下の某寺に住職して居つた頃、求聞持堂の壇の上で、よく鎌首をもたげて居る祥瑞を見たものであると話されたことがあるが、山寺の生活は蛇と親む心掛が無ければ、到底堪えられるものでは無い。況して朔毎に避蛇の法を修すべきことを誡められた今の寺で、蛇が恐くてどうするのであらう。愛すればこそ獅子も忸れる。きん子女史では無いが、どうしてもこれは蛇を愛するに如くは無い。先づあの可愛らしい眼を懷かしむことにしようと、心機一轉、憎惡を轉じて愛好に振り向けたのである。そこで私も一般人と共に巳歳を迎へた

干支に依つて曆の數へ方を便にして居る現今に於ては、己巳に當る年に辨天様が賑ふのは無理も無いことである。然らば辨天様とは如何なる御方であらうか。今、簡單に其の德性を解說して見ることゝしよう。佛敎で云ふ辨天様即ち辨財天は、數

590
474

ある佛、菩薩、明王、天部の中で音樂を司るところの御方である。ところが、後には此の辨財天が福德の神樣として祭られるやうになつたのである。辨財天は又美音天とも、妙音天とも云ふのであるが、それは諸天の詠美を顯はすことから斯く稱するのである。即ち獨特の妙音を以て一切衆生を悅ばしめ言辭を柔輭にして衆心を怡ましめるところから斯くいふのである。其の辨財天が、一轉して福德の神樣となり、遂に我が日本に於ける神傳にさへ錄されるやうになつたのである。さうならば、日本の神樣としての辨天樣はどんなお方であるかといふに、『日本七福神傳』といふ書には「此の經を聞くことを得ば、當に是等悉く猛利不思議の大智慧聚、不可稱量の福德の報を得ん」と述べてある。即ち辨天樣を信ずる程の者は、無量の福德智慧を得ることが出來るといふのである。而して又前に述べた又の名美音天、妙音天といふやうな稱呼

が示すやうに、辨才無碍といふ德性は、一體どんな譯のものであるかといへば、これに四つの特長がある。其の四つとは

一に法無碍辯
二に詞無碍辯
三に義無碍辭
四に樂說無碍辯

といふのである。就中第一の法無碍辯といふのは百千の名字を分別して少しも錯らず、種々の方便を了解するといふことである。第二に詞無碍辯といふのは、一切の諸論に暢達して之れを辯證し、聊かだも壅滯せないといふことである。第三の義無碍辯といふのは、敎法に說いてあるやうに行を修めて、生死界を出で、遂に證果を得る

といふことである。第四の樂説無碍辯とは衆生を饒益し、教法を流通して倦まないといふことである。以上の德性を持つところに辯財天の尊さがあるのである

世間で、「あの方は辯天樣のやうに美しい」といはれますが、其の言葉は、外に顯はれた容貌かたちを云つたものであるでしようか。成る程、容貌かたちの美しい方をさうも謂ふでありませう。然し、ほんとうに美しいといふことは、心内に宿つて居る美しい或るものが外部に顯はれたものでなければなりません。辯天樣は形も心も二つながら美しい。内外透徹して美しいものでなかつたならば、所謂辯天樣のやうに美しいとは云はれないのである。私は其の代表的麗人として、王朝時代に於ける佳人如意尼を擧げたいと思ふ。如意尼が如何に美しかつたお方であるかといふことは、或る時同尼が靈感に觸れ、虚假の快樂を捨て丶ほんとうの道を求めなければなら

ぬと悟得し、潜に從來仕へて居つたところの宮廷を脱け出で丶、攝州に赴かんが爲に或る河の畔で船に乘らうしたのである。すると、舟人等は如意尼の容貌が餘りに、美しいので、恠み恐れて逃げ去らうとしたのである。舟子等が、なぜ逃げ去らうとしたのであるかといふに、彼等は蛇化して妃となつたと思ふたからである。斯くの如き美しい容貌を示すに至つたのは固より天性の素質の然らしむるところではあるが、抑又弘法大師が辯財天女如意寶珠法を修するに當つて、妃深く之れを歸仰し、自己の心内に天女を宿すに至つたが爲でなければならぬ。總ては修養の力である。美しいものをして益々美しからしめよ。磨いて美しくならないものが何處にあらうか。我が敬愛する幾萬の諸孃達よ。あなた方は執念の蛇となつて、互に嫉み視るやうなことをしてはならぬ。彼の舟子に見替へられた如意尼のやうな美しい心を宿すこ

590
474

とに就いて、いとも可愛らしい蛇の眼を注視して貰ひたい。斯くして永い冬眠の蛇の辛棒を美化するならば、あなた方は生活苦を離れることも出來るであらうし、昭明な春を迎へて聽て開運の喜を招くことも叶ふであらう。鏤字ヶ池の畔に建つ辨天祠の前に立つて、私は斯うした感懐を恣にするのである（昭和四、一、）

七　三寶鳥

春はゆかしき山櫻
夏石楠に山つゝじ
秋は紅葉の錦着て
つゞらこゝしき冬の空
弘法大師そのかみに
みあしとゞめし靈刹を
おろがみまつりめはるかに

590
474

心の塵をはらはなむ
青葉の奥の山かひに
三寶鳥の聲聞けば
あゝありあけの月の影
大空高く冴え渡る

仰げよ室生のみ山にて
まどかの月をめでよかし
女人高野の室生にて
眞如の月を宿せかし

弘法大師の詠まれた雜言に山に入る興といふのがありますが、夫を讀んで見まするに、問ふ師何の意あつてか深寒に入る、深嶽崎嶇として太た安からず、上るにもまた苦しみ、下る時にも難む、山神木魅是れを廚と爲せり、君見ずや、君見ずや京城の御苑の桃李の紅なるを、灼々芬々として顔色同じ、一たびは雨に開け、一たびは風に散じ、上に飄り、下に飄つて園中に落つ、春女群り來つて一たび手に折り云々と詠まれてあります。此の雜言には山中の情景が誠に能く描かれて居りまして、箇中の天地の捨て難い趣があり〳〵と見えるのであります。其の事は、又、去來々々大空の師、住することを莫れ住することを莫れ乳海の子、南山の松石は看れども厭かず、南嶽の清流は憐むこと已まず云々と述べられ、天地の心に滲透して居るのです。そうして又山中に何の樂か有るといふ雜言には、山中に何の樂か有る、遂に爾ぢ永く歸ることを忘れたり云々

と述べられ、更に澗水一杯朝に命を支へ、山霞一咽夕に神を谷ふ、懸蘿細草體を覆ふに堪へたり、荊葉杉皮是れ我が茵、意有る天公紺幕垂れたり、龍王篤信にして白帳陳ねたり、山鳥時に來つて歌うて一たび奏す、山猿輕く跳つて伎倆に絶れたり、春の華、秋の菊、笑んで我に向ふ、曉月朝風情塵を洗ふ云々 と述べられて居りますが、其の情景は、山中の生活を恣にした者でなければ、到底之れを味ふことが出來なからうと思ふ。 而して、更に大虛寥廓として圓光遍し寂寞無爲にして樂みなりやいなやと自問自答の境に入られて居る其の寂寞無爲の境こそ誠に樂みの極である。 更に彼の有名な後夜に佛法僧鳥を聞くといふ詩の、閑林に獨坐す草堂の曉、三寶の聲一鳥に聞く、一鳥聲有り人心有り、聲心雲水倶に了々といふ神祕の境涯に至つては、何といふ朗かな心境でありませう。 斯ういつた作物は天地の心に味到せる大師の幽遠な思想から生れ出

づるのでありまして、高野雜筆集などにも、久しく顏色を見ず懷に惆悵す、甚だ涼し、惟るに動用安和なりや、遠く山路の絶えたるを思ひ、近く數言の話を遂げず、思詠に深しなども申されて居るのです。 又彼の性靈集を拜讀して見ますると、山を詠んだ詩には前に申し上げました山に入る興、山中に何の樂か有るといふやうなもの丶外、山に遊んで仙を慕ふ詩といふのがありまするし、雲雨を詠んだものには、喜雨の歌、納涼房に雲雷を望むといふやうなのがあります。 其の他自然に同化せる思想をうかゞふべきものには、蘿皮函の詞といふのがあります、此等の詩を讀んで見まするとと、大師を稱揚して、行は離日よりも高く、聲は彌天に冠たり、山中に坐禪すれば鳥巢ひ、獸狎るといふやうな叙述が、ほんとうに首肯かれるのであります。 夫は弘法大師本來の性行が斯くならしめたのでありまして、彼の小僧都を辭する表の中にも、空海弱冠より知

590
474

命に及ぶまで、山藪を宅と爲し、禪默を心と爲すなぞとも申されまして山川幽谷を愛慕せらるゝ其の情が、眞にまざ〳〵と現はれて居るのであります。さういふお心を持たれて居りますから、山門不出といふやうな淨行をも行ふことが出來るのであります。其の高野雜筆集には又或は空海私願契ひ有つて暫く山門を出でず云々とか、貧道限るに禪關を以てしとか、林泉未だ飽かず、迹を人間に絕つ、逸遊に限られて數々詣てゝ展謁することを遂げずとか、貧道閑靜を貪らんが爲に暫く此の南峯に移り住すとか、貧道禪關未だ通ぜずとか、空海私願期有つて暫く山扃を出でずとか、愚誓期有つて年月未だ滿たずとか、禪關に限られて身心己に違すといふやうな寂寞孤棲の思想が湧き出で、來るのであらうと思はれます。私は常々弘法大師のさういふやうな境涯、天地と一枚になるといふやうな行業、其の行蹟の千萬分の一丈なりとも味は

590
474

つて見たいものであると思ふて居るのであります。そこで每朝、朝のお勤が濟みますると、廣場へ降り立つて四周の自然を眺めるのです。所謂未敷蓮華の形を爲した室生山の一帶、就中精進ヶ峯の邊から强い金線を放射する日光、其の日光は西方の宵間出の方に光を放けるのであります。朝日さし夕日かゞやくあの宵間出の邊に、弘法大師は宀一山記にある鐘銅道具等の寶物を埋められたのではなからうか、霧を吐いては又霧を呑む山間の谷あい、浮雲卷舒の幽景と申しませうか、未敷蓮華の精進ヶ峯には實にえも言はれぬ情趣が日每〳〵開展されるのであります。又三寶鳥が宵の口から曉かけて聲朗かに鳴くのを聞きますると、あゝこうした情景に、お大師様は感催して、詩文を草せられたのではなからうか、こういふ情景がお大師様をして禪餘の筆を執らさしめたのではあるまいかと感じさせられるのであります。私はさう

いふ情景を味ふ毎に、悠々として些の凝滞無く、任運に行動せられたお大師様の偉大さを感じさせられるのであります

○

昭和三年六月二十七日發行の『大坂毎日新聞』奈良版に「保存される室生山に佛法僧鳥」といふ見出しで

女人高野として有名な宇陀郡室生村の室生山は、さきに天然記念物として指定保存のため、三好博士、岡本理學士ら調査、近く指定あるはずだが、同寺林中にも佛法僧鳥が棲息してゐるので、同寺ではこの保護策を講ずることになつた

といふ記事が載せてゐる。 いかさま、六月上旬に天然記念物候補調査の爲、三好博士の一行が室生寺へ來られて、同寺境内及び山林中に生ずるイヨクジヤク、イハヤシダ、

オホバノハチヂヤウシダ、キヨスミヒメワラビ、クジヤクシダ、リヤウメンシダ、ハカシダ、ヌリワラビ、ジフモンジシダといふやうな植物に就いて實地調査をせられたのである。 其の結果、奥の院に至る無明の橋附近に於て、約三千坪の場所を區劃して天然記念物に指定せられるとになつて居る（因に云ふ、同地は昭和三年十一月三十日天然記念物に指定された）是は學界に於ける注意すべき事柄だが、更に快く思はれるのは、精進ヶ峰に於て佛法僧鳥が鳴くといふことである。 先年、權田大阿闍梨耶は高野山に御滞在の砌、其の聲に憧憬れて「三寶鳥聞がうとすればふくろかな」と詠まれたといふことである。 いかにも大阿闍梨耶の風懐を偲び參らすことが出來るところの名句である。 私は上記の新聞記事に刺激されて、聲心雲水倶了々の境に住して見たいと考へた。 そこで、夜遲く、朝早く、其の聲に注意を拂つたのである。 ところが、七月二日のあかつき、まだ明けやらぬ闇を破

590
474

つて、ブッポウ〳〵といふ聲が聞えた。すると、寺內の英明子が、足音を偸んで、廊下傳へに私の座敷へ近づいて來たのである。ふたりは息を殺して其の聲に聞き入つた。ブッポウ〳〵、遙に遠く、奥の院への道が想像される邊に於て。赤堀又次郎先生は、私が室生へ來てから

ありあけの月こそむろにさやかなれ
　のちのよかけてなほてらすらむ

といふ歌を寄せられ、私の心琴を鳴らされた。弘法大師のみ歌と言はれて居る「わが身をば高野の山にとゞむともこゝろはむろに有明の月」の思にあこがれた退耕子は、今春二旬の室生滯在中に、其の曉月を見ることを樂みとした。此の頃のなが雨に私は身も心も腐るが如き想がした。三寶鳥の鳴く音を聞いた翌る日、即ち七月三日の

朝まだきに、私は室生川に架した橋上の人となつて

さつき雨いつしかはれて大空に
　月すみわたるむろのあけぼの

と詠んだのである。山水倶に黝闇、曉を報ずる鐘の音が遙か彼方に鳴り出でた（京都東寺に於ける弘法大師降誕會講演の一節補修）

590
474

八　誦經の會

私は月毎に奥の院に於て御影供を奉修するのである。　神澄み氣はろらかに、茂林にこだまする振鈴の響は、降臨壇の尊き御すがたを迎ひ奉るにふさはしい幽音である。　助法の清衆が誦する讀經の聲は、幽禽の交響樂と相待つて、まこと密嚴世界の觀あらしむ。　さても劉喨たる響よ、私は誦經の聲に心を曳かれて、修法の序すらをりをりに亂るゝ思がする

吾が住する靈山に於て、くさ〴〵の仕事に奉仕せねばならぬと思ひ起したその一に讀書機關として簡易圖書館を設けるといふことがある。　書籍に親むことの必要は今更言ふ迄も無い。　それと共に宗教文化の浸潤普及を計るには、誦經の會を催す

ことが肝要である。　宜べなるかな讀經の淨業は、繁簡其の途を異にし式典其の法を別にすとは言ひながら、我が國に於ては、古來上下の風を成すに至つたものである。彼の神前に於ける讀經に就いて「いまのよのねぎはふりの類ハ、佛をにくむことははなだしくて、神前にハもはらこれをとほざけれど、いにしへハしかあらぬことなり云々」と『ねざめのすさび』に記してあるが、神前讀經の事は、明治維新の際に於ける神佛引分けの結果に依つたものであらう。　多くの伽藍護法神は、鎮守増威光の爲にする法味を喰受せられたものであつた。　思ふに社會生活の基調としての精神修養には各種の方法がある。　私は斯ういふ方面をも顧慮して誦經の會を興さうと考へた

過る五月十八日の夜から、河鹿鳴く室生川のほとり、清流に軒を伸べた參籠所の二階で、同行の面々松平貞三、中村捨松、柏森清次、南喜三郎、柏森彌惣八、物集虎次郎、大西賢

590
474

三、藤本剛次郎、向久保由次郎、木村城吉、奥本仙次郎、柏森榮一、杉本勇吉、井脇正雄、山口房五郎、井脇源松、岡本梅吉、福井伊八の十八名が、歸命毘盧遮那佛の啓請の頌から、聲を絞つて習ひ初めたのである。　此等の人々は、概ね曩祖から弘法大師を尊信し來つたものであるから、其の熱情、其の欣求、既に耳順の年に達して居る人々や、而立、不惑の壯者が、電氣の光と石油ランプの燭光で、漸く文字を拾ひ讀みする熱心さは、尋常徒輩の企及するところでは無い。　宵の閑林に朗かな聲を立てゝ、我が聲に耳を清ませと鳴き誇る三寶鳥も、定めし時ならぬ呀に喫驚したことであらう。　斯くして誦經の會は、農繁期に入つたので一先づ之れを閉ぢた。　思ふに、此等欣求の徒輩が、讀經の會座に連る其のひと時なりとも、幸に如來の冥鑑にかなふことを得ば、其の昔『諸神來聽』の眞境に觸れた道命阿闍梨の古事をも味ふことが出來るであらう

威を增すに茂林を以てし、德を加ふるに深樹を以てする無漏の靈境に、法悅を恣にする淨信の人々が、このやうにして、永への法幸を享くるあらば、是れぞ誠に極み無き佛恩天惠であると言はねばならぬ（昭和四、六、）

590
474

九　寶珠

昭和四年六月十九日から、同月二十八日迄、東京府美術館及び東京三越四階西館で開かれた醍醐寺名寶展覽會、それは東京府後援の下に醍醐天皇一千年御忌奉贊會に依つて催された展覽會である。私は出京の序に、氣忙はしく兩會場を一わたり巡覽した。言ふ迄も無く、醍醐寺は無盡の寶庫であるとまで言はれて居るのだから、斯ういふ催に出陳することが出來る種類の物だけを展覽せられたのであるとはいふものゝ、何れも皆誠に結構な名寶であると思はれた。就中記錄鈔本部に屬する滿濟准后日記、義演准后日記は特殊の意味に於て私の眼を惹いた、而も前者は其の代表的出陳として應永三十年正月一日の條が展げられてあつた、而して其の最初の書下しに

「後夜念誦如常」と記されてある。又醍醐寺國寶繪葉書の古抄本記錄の分に、義演准后日記の慶長三年三月十五日の條が載せてあるが、之れにも亦其の最初の書下しに後夜念誦如常」と記してある。さても其の後夜念誦とはどういふことであらうか

○

弘法大師は、其の御入定に先立つて、二十五箇條の御遺告を認められて居る。誠に卓越した實修實行の俊才であらせられたから、其の御遺告の數々は、東寺勤護の事項から、滅度の後に於ける依師長者の定規、諸寺附屬の事、寺門の地位、師弟道の誡め、學習の條々、後七日御修法に關する事共及び僧房の制禁、傳法灌頂阿闍梨の職位其の他眞言密教紹隆に就いての事柄が、事細かに記されてあるのだが、其の終の三條に「宀一山土心水師が建立する道場に、朔毎に避蝕の法三箇日夜修すべき緣起第二十四」といふ

590
474

のと「東寺座主大阿闍梨耶如意寶珠を護持すべき緣起第二十四」といふのと、「若し末世凶婆非禰等有つて蜜華薗を破せんと擬せば、應に修法すべき緣起第二十五」といふのがある。此の三ヶ條は、眞言宗に於て室生山が如何なる地位を有するかといふことを、弘法大師が詳しく書き殘されたものであるが、即ち此の御遺告に基いて、苟も眞言末徒たる者は、必ず每朝室生山に勞籠せる如意寶珠を遙拜せなければならぬことになつて居るのである。滿濟准后も義演准后も同じ流を汲む宗門の淨侶として、斯くも尊く道肝を室生山精進ヶ峰に籠め、後夜念誦の法を修されたものであつた

○

諸賢、若し來つて此の靈峰を巡らるゝならば、果して何物を贏ち得ることが出來るであらうか。近來、大台が原を中樞として大和大公園の設定が企畫されて居るが、其

の支脈を爲すところの高見山連峰に、所謂兜岩、鎧ヶ嶽、屛風岩の奇巖がある、而して我が未敷蓮華の室生山は、八朶の靈容を其の西南に示現して居るのである。彼の山裾を縫うて流るゝ室生川、退耕子の句に「室生寺や川を境に淨不淨」といふのがある。其の淨、不淨を分界するところの清流は、自から幽邃の勝景を爲し、岩を嚙み、砂石を洗うて流れ行くのである。斯かる境地、斯うした淨域こそは、誠に天下無雙の靈地、朝中第一の祕處、大聖人の定禪窟といふべきである。而して五智圓滿を表示するところの五部峰、三祕密の實相たる三股ノ峰は、自ら靈域の廓を成して居るのみならず、又河中の七淵は、さながら無所不至の體清淨身密になつて居る。且つ七重の層を成して居るところの此のお山は、即ち又金輪七寶を顯表せる威容である。されば永く眞言密敎の寶處として貴ばれ來つたものである。彼の『續群書類從』に收め錄してある「宀一

590
474

山記」に「毎日曉に祕印に住して彼方に向ひ、一經十二品之れを觀ぜよ、並に白蛇法此れを修すべし、是れ東寺小野の祕傳なり」と記してあるが、之れが即ち前に掲げた滿濟准后日記や義演准后日記等に出て居るところの後夜念誦法と同じ祕法を謂ふたものである

○

元來、宀一山記の記述は、弘法大師の御遺告に依つて認められたものであるから、室生山に關する稱呼が極めて嚴格に使用されて居る跡が見える。 即ち山記に室生山とは三部の密號、精進ヶ峰とは五部の祕號なり」と述べてあるが、之れは御遺告の「但し大唐の大師阿闍梨耶の附屬せらるゝところの能作性の如意寶珠は載頂して大日本國に渡り、名山の勝地に勞はり籠むること既に畢んぬ。 彼の勝地とは所謂精進ヶ峰

土心水師が修行の岫の東の嶺のみ、ゆめ／＼他人に彼の處を知らしむること勿れ、是を以て密教劫に榮え末徒博延せん」と述べられてある其の祕號、即ち精進ヶ峰を表としての大師の心を顯はしたものが、融圓權僧正の書寫に係る宀一山記の根本を爲して居るのである。 弘法大師は其の相承學習せるところのものを、日本朝中に隈無く傳へやうとおぼし立たれたのであるから、好んで山川を跋涉されたものである。 即ち到るところを修禪觀法の庭とせられたのである。 風土記などを讀んで見ると、大師の遺跡、大師に關する奇瑞等の事が澤山出て居る。 勿論、夫等の多くが、後人の涅造に係るものであることは言ふ迄も無いのであるが、何としても、大師は人一倍自然を愛好されたものであつた。 自然を愛好された大師は足跡を諸所に印した、而して閻浮絶類の靈場、日域無雙の寶處、佛法の眼肝、神道の髓腦とまで室生山の勝景をたゝへ

せしめた礎地を築かれたのである。大日如來の心肝たる如意寶珠を、臥虎、蟠龍の趣致ある精進ヶ峰に埋められた大師の思召は、眞實、室生山精進ヶ峰を佛駄の祕藏衆生の靈寶と認められたからである。山といひ、川といひ、木といひ、草といひ、何れも皆此の靈峰を莊嚴するところの瓔珞である。況して宀一山龍穴の祕事に至つては、怪奇といはゞ怪奇といふべく、靈妙誠に思議すべからざるものがある。先年岡倉覺三大人は龍穴に寶珠を求めやうとして遂に得ることが出來なかつた。そこで思を一詩に述べたことがある。夫は下のやうなものである

入大和國室生山如意龍窟求寶珠不得有感

春雷一夜蟄龍驚。誰放魔王入法城。萬岫無心雲倒落。九天自在月空生。大塊小鬼酒邊影。白骨青山苦下名。欲碎靈珠爲粉土。煩惱百八未分明

此の詩を詠むに至つた緣由は、岡倉大人及び我が曩祖丸山貫長阿闍梨が、弘法大師の御遺告を眞讀された結果、其の勞籠された如意寶珠を現實に拜まんとせられたが爲であつた。然し其の純な志求も、遂に酬ゐられず只蟄龍を驚かしたに過ぎなかつたのである。融圓權僧正の龍穴に關する記事中に「此の龍穴、昔よりこのかた、小野僧正仁海の外更に入る人無し、近ごろ、人有りて押して入らんと欲すれば、大風吹き出でゝ向岸に吹き著け腰を打折るなり云々」と記してあるが、さういふやうな慘事を招かなかつたことは、岡倉大人、丸山阿闍梨並に行を共にせられた人々に取つて、せめてもの幸であつた

590
474

祕記の所述に就いて、私は是非の論を構ひたく無い、たゞさういふ神祕的情景は、私共密教修行者に取つて、信修の對象、弘法大師が祖述された眞言の行法、而も國家の大法たる後七日御修法の本尊として、室生山精進ケ峰が今も猶ほ其の麗妙の尊體を示さるゝことは誠に比ひ無き地上の尊嚴と言はなければならぬ。滿濟准后も、義演准后も、眞に靈山の靈山たる所以を感得せられたればこそ、斯くも道肝を此のお山に寄せられたものであらう(昭和四、八、)

590
474

一〇 龍穴に寶珠を求むるの記

余の龍穴に憧憬るゝこと久し、それは私が今から六年前に「祈雨法修行地としての室生の龍穴に就いて」と題して一文を草した頃から、實に室生の龍穴こそは私に取つての憧憬の境地であつた。昭和三年四月九日、私は青堂子と共に龍穴の幽境を探つたのである。室生の深山を窮めたほどの者であるならば、誰とて其の山容水態に、果た堂塔靈佛に、もしは其の奇しき語りぐさに、驚異の胸をとゞろかさぬ者は無いであらう。遍照金剛空海阿闍梨が、成陽宮のたゞずまひに似たりとも似たり、此の靈境こそ、阿闍梨所傳の如意寶珠を勞籠すべき唯一無二の淨域なれと、苟も學密の徒が眼肝を守護するの心に住し印明を尊ぶの思を以て室生山精進ケ峰に想を寄せ、後夜念誦の

590
474

法を修すべきことを遺誡された其の思召を究むるならば、我が蟠龍の穴は、まこと修道者の心を躍らす靈境と謂ふべきであらう

室生川に架した朱塗の大橋を渡つて、伊勢へ通ずる山道を進めば、大師山の半面は壓するが如くゆん手に聳立して居る。　翠色濃き杉、檜、松、栂は今や開き初めた櫻樹を孕んで深山の誇を恣にして居る。　斯かる山色美を苞莢として朱丹の堂宇が隱見する風趣は、龍が淵の深潭と相待つて一段の雅興を添えるのである。　山か、寺か、堂か、佛か、もしは虹梁勾欄の技、寶瓶寶蓋の工に至る迄、何物か時代を語り、自然を表はさぬものは無いのである。　神寂びた龍穴神社の奥の院を右に見て、木馬道を便りに、羊腸の坂路を辿り行くこと約三丁、淙々の響聞え、嵐氣一入身に泌むものがある。　遙に前面を仰げば層々崖を爲して天柱挂え俯して脚下を瞰れば飛瀑岩頭を掠めて流る。　斯

かる境地に處して、私共は暫し吾れを忘れて天工の美に醉ふたのである。　先づ、私が尻をからげて龍の馬場に降り立てば、靑堂も亦續いて急矢の如く流るゝ水を渉り、深淵を前にして龍穴を望み見た。　あゝ是れ龍穴！嘗ては弘仁八年六月天下旱するに當り、修圓律師をして雨を祈らしめてから、翌九年七月十四日にも祈雨の法を修せしめた其の靈域、爾來千有餘年の間、此の事に關する載籍の事實は、まこと摟指に遑無き程である。　彼の藏經密部所錄の經軌に說くところを如實に現證せるもの即ち宀一山の龍穴である。　穴は何處まで其の邃竅を導くか、彼の岩頭を掠めて流るゝ飛瀑を前にして、甲へる其の體、爛たる其の眼、利きこと電の如き尖爪を目のあたりに見入つたならば、そゞろ慶圓が古事を思ひ出でゝ、冷たき岩上に慴伏せざる者は無いであらう。　求聞持嶽の麓に於ける善如龍王の祠堂は、是れ勸請龍神の鎮座するところ、「龍

之馬場」とは今吾等が立てる巖の庭を呼んだものである。又彼の九穴八海不二處の淨境、三沙羅吉祥龍穴の昏廓、龍は穴を出でゝ何處をさまよふたか、即ち或る時は「三穴の淵」に眼を怒らし、「悪龍の淵」に毒氣を吐き、而して「影向の池」に吾れと我が恐ろしの貌に見入つたことであらう

○

「龍珠獲て晋むみ寺や辰の春」之れは雨峰老兄が年初余に寄せられた句である。私は、今龍珠を獲んとして穴の前に立つ、一陣の凄風起つて冷氣肌に泌み、飛沫衣袂を濕す、淙々たる其の音、陰慘たる其の境、碧潭玉を躍らし、怪岩毒氣を吐く。顧みれば青堂亦默然として水に對す。玆に於てか、吾は我が幽境の么微を傳ふる技無きを悔ゆるのみ（昭和三、四、）

二　信の躍動

御法條（方丈）様御聞キ下サイマセ、昨年ハ御台シ（大師）様ヘ御参リノ節ハ御立寄リ下サレ、何ノ御愛素（想）モ御座居マセンデシタ。又ヅヅ（念珠）ヲ早々ニ御送リ下サレ毎日拜ンデ居リマス。私モ八十二歳ニナリマシタ。何卒丈夫息災ニ御願ヒ致シマス。先程御膳ノ物四圓三十錢名張ノ中山様ヘ御送リ致シマシタ。御受取リ下サイマセ。田中力松ハクノノ家内デ御座イマス。五年前ハ百姓デアリマシタガ、酒屋ノ株ヲ買ヒマシテ酒ヲ作ラサシテ戴イテ居マス。御台シ（大師）様ニモ御セッタイヲサシテ戴イテ居マス。家内一同丈夫息災ヲ御願ヒ致シマス。家内ハ只今十三人居リマスガ、冬ニナルト十七八人ニナリマス。何卒法條（方丈）様、丈夫息災ニ御願ヒ致シマス。何卒酒モ

590
474

都合ノ良イ様ニ御守リ下サル様呉々モ御願ヒ致シマス。私モ御台シ様（大師）ニ厄介ニナリマシテカラ三十年程ニナリマス。何卒、マメ息災ニ御願ヒ致シマス

昭和五年三月三十日

田中クノ

法（方）條様

○

私は昭和五年三月二十五日、豊山派宗務所に於て開かれた弘法大師千百年御遠忌記念事業傳記課委員會に出席して、各委員諸師と共に眞言宗年表出版に關する協議に與つたのである。續いて其の事業の一部として自分が擔當して居る法儀、制度に關する記録を蒐集し、整理する爲に若干日を費し、四月六日、我が山に歸つて見ると、留

守中の郵便物が堆く机上に載せてあつた。私はカバンを開く間も無く、一々其の郵便物に目を通したのである。今玆に掲げた前記書信は、其の時讀んだ一通である。ところが、此の書信を讀んだ後、私は、ゆくりなくも、昨年の春、私が準四國靈場を巡拜した際に遭遇した或る出來事を思ひ浮べたのである

私は良照、照雲の二人を伴うて、昨年四月二日、準四國靈場の巡拜に出向いたのである。朝まだき、室生川に架けられた丹塗の橋を渡つて、惡龍ヶ淵の邊まで來ると、後ろの方から「照雲さん〳〵〳〵……」といふ女のさけび聲が聞えるのである。振り返つて見ると、年の頃六十前後の婦人が、私共の後を追うて走つて來るのである。たゞならぬ此の有樣を見て私共は歩む足を止め、婦人の追ひ附くのを待つた。息せききつて追ふて來た婦人は、村の野口某の妻女であつた。「照雲さん、其の荷物を背負はさせ

590
474

てくだされ」と、遍路の旅には折々出て遭ふ出來事ではあるが、門を出てから三丁も來るか來ないかに、もう此の有樣を見せつけられては、心弱い私が、暗然として涙を催すのも無理からぬことである。私共と彼女との間には遍路に就いてのくさ〴〵の話が出た。軈て鬼ケ城の坂路を越えて茶屋峠に着いた時、送つて來た良照の妻と、野口某の妻女とに別を告げて、私共は第八十番の札所たる寶積寺へと巡拜の途を急いだのである。斯くして其の日は第八番の札所に足を洗ひ、夫から三日目の午過ぎ阿保の街道を歩んで居ると、私共を手招ぎ、身を躍らして「遍路さん〳〵」と呼ぶ者がある。そこで、私共は呼ばれるまゝに其の家に着いたのであるが、打ち見ると、八十歳位の老婆が

「おう遍路さん、ようお寄りなさされた、お茶なと一杯飲んで行つてくだされ…………

何日出られました？さぞ御くたびれでしたらう…………何處の御方々かな…………」

と口まめに問はれるので、良照は

「私共は室生の者です、二日から出ました、お陰樣でさう疲れも致しません、此の方は…………」

と答へた。すると老婆は

「あゝ、さうですか」

と思ひがけ無いといふやうなそぶりを見せたが、暫し打ち案じた末に

「室生のお方とあれば御話がある。前かど私にずゞを送つて呉れるといふ事であつたが、未だにそれが屆か無い。一躰ずゞはどうしましたかな…………」

と、一すじに待ちわびる切な心で、貰ふべかりし一連の念珠を、この時にこそと言ひ出

590
474

でたのであつた

「夫は誠に濟みませんでした。　私が遍路から歸りますれば、早速お送り致します。どうぞ、夫迄待つてください」

と詫び言を述べたのである。　私は遍路の旅を終へてから、此の約を履んだのであるが、前掲の書信にヅヽを云々と書いてあるのは即ち其の事を謂ふたものである。　私共が其の老婆と語り合ふたのは、單に送るべかりし念珠を送らで過した爲に、之れを送るべく督促し、又其の約を果すべきことを契ふた事のみでは無い。　良照は其の話が濟んでから徐ろに口を開いて

「お婆さん、今日はあなたのお家へお大師樣をお伴して來ましたよ」

と、私が頸に懸けて歩いてゐる袈裟行李の袋を開いて、御像を目の前に開扉すると、老

婆はヒタと其の前にひれ伏して

「お室さんの弘法大師さま、遍照金剛さま、田中力松一家十三人、マメ息災に暮されますやう、日々の接待をさせて戴いて居ります、一家十三人の者がマメ息災に暮されますのも………」

と、老婆のねぎ言は盡きる期も無かつたのである。　私は暫し其の有樣に見入りながら、信ずる心の躍動とは此のすがたであるなといふことを思はずには居られなかつた。　老婆の信は純である。　彼の女が弘法大師に歸依し奉る其の眞情は、怠り無く日々の御接待を行ふことにも顯はれて居るし、家内一同マメ息災に暮して居るといふ感謝の情にも知ることが出來るのである。　されば、老の身の縁から落ちなんとする危さをも打ち忘れて、街道を行く遍路姿の私共に對して接待せられた其のやさしい

心、さては室生の者であるといふことを聞くや否や、一すじに待ちわびた切な心で貰ふべかりし一連の念珠を授からうとする言葉のはし〴〵、其の一場の劇的光景に、私は、信ずる者の心の躍動は、眞に斯うしたものであらうといふことを感じたのであつた（昭和五、四、）

昭和六年五月五日印刷
昭和六年五月十一日發行

室生雜記奥附
定價金參拾錢

不許複製

著作者　奈良縣宇陀郡室生村大字室生　荒木良仙
發行者　奈良縣宇陀郡室生村大字室生室生寺　右代表者　荒木良仙
印刷者　東京市本郷區湯島三組町八十一番地　川邊多喜男
印刷所　東京市本郷區湯島三組町八十一番地　川邊活版所
發行所　奈良縣宇陀郡室生村大字室生　室生寺
發賣所　東京市本郷區春木町二丁目廿一番地　森江書店
電話小石川(85)四一八二番
振替口座東京八貳壹九番

590
474

590
474

590
474

590
474

NO.

PATENTED NO. 119016

"F-M"

PAMPHLET BINDERS

are carried in stock in the following sizes

Catalog No.	High		Wide		Thick
851(菊倍)	30. cm.	x	22.5cm.	x	1cm.
852(四六倍)	26. „	x	18.5 „	x	1 „
853(菊)	22.5 „	x	15. „	x	1 „
854(四六)	18.5 „	x	12.5 „	x	1 „
855(特)	24. „	x	15. „	x	1 „

Special sizes are made to order

LIBRARY SUPPLIES IN ALL KINDS

F. MAMIYA & CO.

OSAKA-TOKYO-FUKUOKA

室生山

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black